

一九九三・一二・一五 第二七九〇地区第3回諮問委員会における卓話より

社会的責任の中心 としての職業奉仕

パストガバナー
鈴木憲輔



強力な国民は決して繁栄のうちに育ったのではない。むしろ繁栄は精神的及び肉体的懶情をうみ、結局は破滅の前奏曲ともなりかねないものである。

——ポール・ハリス “This Rotarian Age” よし——

今年（一九九三年）の職業奉仕月間で私は第二七九〇地区の一〇のクラブで卓話をさせて頂きました。この間、私は皆様から多くのことを教わりました。以下申し上げることは、その時の皆様の御意見の結集と言えるかも知れません。

まず最初に私の職業奉仕というものに対する基本的な見解から申し上げますと、それは、「職業奉仕とはこの社会を作ることである。それは奉仕中の奉仕であり、私共の一切の奉仕の源泉でもある」ということであります。

最近毎日のように新聞紙上に報道される政財界の不祥事件は私共の心を暗くし、国民としての誇りすら失い兼ねないものがあります。特にバブルの崩壊と共に露呈された最近の国民の沈滞した気分は終戦以来私共が、かつて経験しなかったもののように私には思われますが、皆様は如何でしょうか。私はこのような場合に最も大切なことは、

やはり一度ものの本質に立ち還って深く考えてみることはないかと思えます。

ポール・ハリスの

『This Rotarian Age』より

当時のシカゴの**状況と職業と社会の関係** そのような気持ちから私は先日ポール・ハリスの『This Rotarian Age』を読んでみました。そこには一九世紀末のシカゴにおける人心の廢頹が如実に描かれており、これに対してポール・ハリスは次のように述べております。

「それにも関わらず、シカゴには見逃してならない勢力があった。それは市民の胸に潜むシカゴ魂『Will』の精神であった……心ある市民は文化的な聖なる戦いを待ち望んでいた。そしてこのような物情騒然たる都市シカゴこそはロータリー発生の絶好の地であったのである。」

そして彼は一九〇五年に同志三名と共にまず職業奉仕の団体としてロータリーを創設しました。

職業が私共の生きるためのものであるということとは当時も今も変わらぬ事実であります。しかし職業にはもつと本質的な意味がある。それはこの社会を作っているということです。それは丁度私共の細胞が体を作っているように職業はこの社会を作っているのです。ただ細胞と違う点、それは細胞には意識はありません、しかし人間には意識があります。そして社会を創造し、より高い価値を実現しようとする意欲をもっていることです。

「最も奉仕する者は最も報いられる」というあのシエルドンの言葉はこの人間と社会との本質的な関係を最も簡潔に言い表しているように私には思われるのです。

私共はこの世に生を受け、二〇余年近く学校に通いますが、その目的は何等かの職業につかんが

ロータリーのありかたが一層はつきりとされることになりました。

この決議では……「クラブが一固まりになって行動するような活動よりも、広く総てのロータリアンの個々の力を動員するものの方がよりロータリーの精神にかなっていると言える」と述べ、次いで「クラブにおける活動は会員に奉仕の訓練を施すための言わば研究室における実験としてのみこれを見るべきである」つまりロータリーにおける活動の目的は私共一人一人がこの社会に奉仕するという自覚を与えることであって、クラブとしての活動はそのための訓練、つまり一種の生涯教育のための学校（理想は松下村塾）のようなものだというのがこの決議の主旨ではないかと思えます。そしてロータリーでは前者を一応「個人奉仕」、後者を「集団奉仕」と言っております。

ためだと思えます。そして職業を通じて社会の発展に尽くすということは人間として本来の使命であり、人間はこのためにこの世に生まれてきたと言っても決して過言ではありません。ポール・ハリスは上述の著書の中で社会奉仕のことを「人間の最高の道楽」と申しておりますが道楽でない社会奉仕、それは職業をおいて外にはないのではないのでしょうか。

職業奉仕か社会奉仕か、

決議二二―三四のできた意味

一九一〇年代にロータリーではその目的について職業奉仕か社会奉仕かということで大論争が起りました。そして一九一七年にはこの中の社会奉仕を主張する人々が分離独立をしております。

皆様は決議二二―三四というものを御存じだと思えます。そして一九二三年にはこの反省から

集団主義の復活とその結果

ところが一九七八年になってRI会長レヌーフの時にロータリーには再び集団主義が復活されました。これについて彼の「多数の鉄砲より一つの鉄砲」という言葉は有名です。そしてその考えの下に御承知のポリオプラス運動が行われ、更に一九八七年には「職業奉仕に関する新方針」が発表されました。そしてこの新方針ではこれまで職業というものが専ら個人の責任において行われることが当然だとされてきたものが、ここでは集団化されたのであります。即ち新方針では ①職業奉仕はこれからクラブと会員の共同責務となったと言い ②はクラブと会員の役割を定め、クラブは会員のためにプログラムを開発し、会員はそのプログラムに応えるとされております。

しかしこの考えは、これまでの職業奉仕の考えの下では明らかに種々の無理な点が考えられます。

例えばクラブと会員共同との責務と言つても会員が何等かの事業を行うために銀行から借入れをする場合、クラブでの保証というようなことは有りうるでしょうか。又例えば会員の中に一流の画家がおられたとした場合この会員のためにクラブでそのプログラムを作るといふようなことが果たして可能でしょうか。しかしこのことは何も画家に限つたことではなく専門職の団体であるロータリーの総ての会員に当てはまります。そんな訳で同方針ではこれまでの職業奉仕というものの考えを根底から覆えさざるを得なくなつたのであります。即ち綱領における「自らの職業を通じて」と言うロータリー創設以来の本旨をなくして、その代りに人様の職業のためのお手伝い例えば職業指導とか情報提供というようなものが職業奉仕であるということになりました。しかしこのことは先の決議二二―三四でロータリーの精神と言

ものの本質を見ることができたのであります。そもそも職業というものは人間が二度とない自らの人生を賭けて行ふ創作ともいえるものです。そして私共一人一人の人間には社会に対する貢献の無限の可能性を秘めており、この価値の集積が即ちこの社会なのだと思ひます。そしてこのような人間存在の本質とも言うべきものを「職業奉仕」としてロータリー運動の中心にとらえたポール・ハリスの慧眼に私は今更ながら驚かざるを得ません。そしてロータリークラブが専門職の集団であるということの眞の意義はロータリアンが自らの職業を通じてこの社会の創造に献身することを中心としてのみ私共はこれを理解できるものであり、それは職業倫理を説くロータリーがロータリーであるための基本条件であると思ひます。職業奉仕こそはロータリーの生命である、私はどうしてもそう思わざるを得ません。

われていた「個人奉仕」をなくしてその手段であつた訓練つまり「集団奉仕」を逆にロータリーの目的にしたと言へると思ひます。しかし皆様はロータリーの綱領 (Object) をお読みになればお解りになるようにそこに書かれてあるものは総てが職業人として人生のありかた、つまり「個人奉仕」に関わるものであります。そして綱領の第2に述べられているロータリーの四大奉仕の一つである職業奉仕は決して他人の職業のためのものなどではなく自らのものであることは明白であります。職業は社会的責任であり、自分がこの世に生れてきたことを価値あるものにするからです。

私は今年一〇月長野市にある東山魁夷美術館を見て参りました。ここで私が最も感動したのは彼のこれまでの生涯の歩みを収録した二本のビデオでした。私はこれにポール・ハリス以来ロータリーで言つてゐる職業奉仕つまり個人奉仕という

ポール・ハリスの根本思想とその現代的意義
私は甚だ僭識ではありますがここで自分の理解しているポール・ハリスの根本思想とその現代的意義について述べさせて頂きます。

①は彼の奉仕的的人生観であります。人生は奉仕である、それが彼の思想の根本です。言い換えれば人間がこの世に生まれてきた目的は社会に奉仕しこの社会の創生に参与することにあるということです。

②は宗教、民族、人種、企業、職業、諸団体や国家、等を越えてという彼の共同体的な世界観とも言うべき思想です。それは正しく人類としての永遠に変わることのない理想であると共に、それを可能ならしめるものとして彼は友愛の精神の至高性（絶対的な価値）を訴えています。

③は総ての人間における良心の自由の尊重——即ち寛容、思いやり、謙虚さ、友愛、礼節、それ

と共に真実に近付かんとするポール・ハリス自らの行動に示されておる「実験的」な態度です。これは何よりも事実を重んずる近代科学を生んだ普遍妥当性を求める民主主義の精神そのものだと思います。そしてそれは社会のより良き発展と総ての人間の真の心の幸せの基盤でもあると私は思っております。

④に彼は、決して単なるコスモポリタンではないということですが。例えば彼は三才の時より父母の下を離れ祖父母に育てられています。その時体験した自由で愛に溢れしかも嫉の行き届いた家庭の素晴らしさや、苦難というものの人生における価値を高く評価し、しかも彼は自らがアメリカ人であることを誇りとする真の愛国者でもありませんでした。

以上の四つの点は“*This Rotarian Age*”や彼の二つの自叙伝をお読みになった方は皆お気づきの

ことだと思えます。

私は現在の日本ほど、世界の日本としての新しい意識改革が求められている時はないと思えます。そしてその解決の根本は皆様お一人お一人が他人をあてにするのではなく自らの責任（良心の判断）において自らの人生を真に価値あらしめんとするその努力によってのみ達成できると思えます。かつて世界の驚異とされた明治維新の方向を頼山陽や吉田松陰らが示したように、ポール・ハリスは今日まで欧米すらも果たすことのできなかつた新しい時代の生き方を私共に示していると思えます。そして彼の思想の根本である奉仕的人生観の中核にあるものが職業奉仕即ち私共の社会作りであることは疑う余地はありません。事実職業は個人の創造性によって不可能を可能とし、人生を真に価値あらしめるものであります。しかし社会は日進

月歩であって、技術の面だけとらえてもそれに追いつくことは私共にとって容易なことではありません。又一方精神的な面においても、もしここに医師としての私共の分野における例を挙げることをお許し頂けるならば、精神疾患の患者の治療において人間としての苦悩の極限とも言うべき「妄想や不安」に対して私共が真に彼等の心の事実に理解を示す愛情と情熱無くしてその病気を治すことは不可能です。

しかし、私共にとっては一方においてポール・ハリスが人間最高の道楽と言った奉仕を行うことも勿論必要です。何となればそれは根本において職業奉仕とその心においては全く同じだからです。しかしそれは相手に永続的な自覚をもたらし得るといふ判断の下に行われなければならぬと思います。特に、最近アメリカを中心として起こっているボランティア活動を中心とするいわゆ

る社会セクター運動に関しては、これからの新しい時代の生き方（自己開発）として、私共日本においても大いに注目し研究すべきものであると思っております。

以上のことを一口で申しますと、個というものには常に全体における個として行動せよということになります。この全体は時に家庭であり、あるいは地域社会であり、又企業、職業、国家、国際社会、そして世界となります。しかしこれらの間を中心となる全体は大古の家族だけであった時代から農耕時代における部落などを経て現在の国家や国際社会という巨大な全体に発展してまいりました。しかしいづれの時代においても個は良心の座でありそれが創造性と責任感の源泉であることに変わりはありません。従って個を尊重せずして全体の発展はありません。しかし反対に全

02
子 2904
ロータリー文庫

資本や土地や労働よりも、知識が主要な生産要素となった新しい時代における組織経営の基本は、命令やコントロールではなく、人々の責任感を中心とする創造性の展開にある

——ピーター・F・ドラッカー「二十一世紀の企業経営」(要旨)——

著者住所：千葉県八千代市八千代台北六〇七三 (〒二七六)

八千代中央病院 鈴木憲輔

体を忘れた個のみの主張は、全体を衰滅せしめ結局個をも死滅への道を辿らしめます。要するに奉仕という個と全体との関係を基本軸とするロータリーの「奉仕の理想」の哲理は、この両者を調和せしめ、個に全体に対する使命感と生きがいを与えるものとして、企業や国家などの持続可能な発展を可能ならしめそれは世界平和の真の根源でもあると私は思っております。

今日の二月一五日という日はウルグアイ・ラウンドにおいてわが国のコメ部分解放が採択される日であります。この世界協調の糸口となった記念すべき日に私が皆様方に卓話をさせて頂く光栄に浴したことは私としては誠に感慨無量でございます。長時間にわたりご静聴を頂いたことに感謝し、今後における皆様の一層のご指導とご教示をお願い申し上げます。拙い私の卓話を終わらせて頂きます。

(一九九三・一一・一五)



(著者の12歳の時のスケッチ)